

祝本狂言集と狂言記

——外篇の用語との比較から——

大倉 浩

○、はじめに

「祝本狂言集」〔以下「祝本」と略称〕は、鴻山文庫蔵の写本で、本狂言をわずか二三番収めるだけの小部な文献である。成立年代や筆者はともに不明ながら、永井（一九八七）の紹介によれば、内容的には天正狂言本と虎明本・天理本との中間に位置する、流派分化以前の狂言の姿を残す貴重な台本と見られる。

いっぽう、四種の狂言記、特に正篇と外篇は、刊年や詞章・内容からも近世初期の、流派や詞章固定以前の姿を残す狂言台本をもととしたものと見られ、拙稿でもこうした立場から虎明本や天理本との用語の比較などの考察を進めてきた。

本稿では、狂言詞章の用語整理・統一の過程で注意される語句について、祝本と狂言記（特に外篇）とを比較すること、それぞれの位置の確認をする。

一、先行研究

祝本については前述の永井（一九八七）に書誌や内容についての紹介がある。所収の狂言各曲についても簡単な比較が行われているが、それらの結果として、永井は成立年代や関係する流派について、次のように推定して

いる。

祝本は天正狂言本よりは江戸初期諸本に近く、江戸初期のものの中では天理本に最も近い。だからと言って和泉流の台本かと言うと、そうは言えない。天理本との近さは、天理本が前代の演出等をよく伝えていたからであろうし、虎明本との違いは、虎明本に式楽化を目指す当時の大藏流の規範化・排卑俗の行き方が反映しているためと思われるからである。(中略)吟味すべきことを多く残してはいるが、虎明本の形に固まる前の大藏系狂言の様相を伝える台本が祝本であると考えたい。(一五七べ)

これをうけて、語学の立場から祝本について考察したものに坂口至(二九九一)(一九九七)がある。特に坂口(一九九七)では、他の狂言台本との用語の比較が多方面から加えられており、本稿でもこの考察に負うところが大きなのであるが、比較の中で狂言記は正篇を中心として考察されている。本稿では、狂言記では外篇に注目する。というのも、祝本所収の本狂言二三番中では、外篇と共通する曲が九番と他の三種の狂言記に比べて多く、さらに後述するように、用語の点でも「(さ)しらるる」「おしらるる」「まらする」の使用など共通する特徴を持つているからである。

二、本文について

まず、祝本での記述を実際に見てみよう。

一、大名出て、長々在京仕候。そしやう相かない、本地被下るのみならず、しんちまではいりやう仕つた。さあれば御暇出候間、国本へ罷下と言。あさうのごとくに。太郎、馬にのせう、又馬にのるまで牛にのせうなど、ざれ事言。扱此中方、へ被召寄候事、おびた、しき事ではないか。暇ごいにそれがしも各をふるまをふと存ずるが、いかゞあるぞといふ。何ぞさかなはあるまいか。いや、なにも御座らぬといふ。大名町へいて何成共もとめてこいといふ。太郎 かわりはいかゞ御座ろぞといふ。

(ぬすむがん 六オウ)

このようにセリフと書きが判然としない部分もあり、台本⁵と言うより筋書き的な記述が目立つ。この「盗む雁」冒頭部分でも「あさうのごとく」など、祝本所収二三番中にはない曲名が見えることから、ある程度のレパトリーを持った狂言師の残した私的な手控えが、祝本ではないかと考えられる。こうした記述形態は一六世紀末の天正狂言本と共通している。一例として次に「末ひろがり」の全文を示す。

一 大明出て人をよび出す 都へ行ていかにもたかひ末ひろがりかふてこよとゆふ さてのぼる 都につきてよばわる べたらし一人出でさし笠をうる もしせうはら立ばはやし物 へ御笠山／＼人が笠をさすならば我も笠をささうよとおしゆる くだる しうこれ見てはらをたつる おつはしらかす 其時はやし物しううかる、もろともにおどるふへとめ (一五〇ウ)

この筋書き中心の天正狂言本の記述と比較すれば、祝本の記述はより詳細になっており、狂言師が詞章を含めた手控えを必要とする固定伝承期（一七世紀半ば以降、狂言が武家の式楽として演目や詞章を固定化する）に、祝本が書き留められたことを推定させる。ただし、自流派の狂言を伝承させるべく書き記した大藏流虎明本や和泉流天理本とは、記述態度にかなりの相違がある。ある程度筋書き的な記述の残る天理本での「がん盗人」の冒頭と比較してみる。

一 出で、あさうのごとくに、名乗也、太郎くわじやよび出す シテ／＼出る 在京のうち、咄た衆を、今晩ふるまふと云て、さかなを、よふいせよと云 シテ／＼俄の義で、なにとも、なりまらすまひと云、はや、おやくそく申であるに、へんがへする事が、なる物かと云 シテ／＼さやうに、御意なされても、ならぬ事で、御ざると云 へふるまひも、そさうにせうと云 シテ／＼とかく、かしこまつたと云て、

(雁盗人 上一七九オ)

冒頭の名乗りが、天理本では「あさうのごとくに名乗也」と省略されていて、祝本と似たところもあるが、セリフが対応するほどの一致はない。前述の永井（一九八七）の指摘と重なる点である。天理本の記述の仕方は、役名や合点を付すことによってセリフが明示的になっており、伝承すべき狂言の台本としての配慮が感じられる。

こうした整備が一層徹底しているのが虎明本である。

＼名乗は入間川のごとく下人よび出し 追付て国本へ下らふが、さりながら、此中某が事に色々きもを
いらせられて御地走なされたる衆を、ふるまふて下りたひと思ふが、何とあらふぞ 誠におの／＼のお
きもいりなされればこそ、おほしめすま、にあひすんで御ざる程に、おふるまひなされいで、かなはぬ
事でござる ざあらば汝は町へいて、さかな物をもとめてこひ 畏てござる

(雁盗人 一六七べ)

役名こそほとんど付されないが、伝書として家の狂言台本を書き残そうとする意識が明確に表れている。これら流派の伝書と比べると、祝本はあくまでも狂言師自身の手控えであり、それで十分であった時期、すなわち固定伝承期の最初期に書きとめられたことを推定させる。曲名が、虎明本・天理本では「雁盗人」とあるのに、祝本では「盗む雁」と異なっていることもこうした時期の違いで説明できそうである。

これに対し外篇など狂言記は、版本であり、多数の読者にセリフと挿し絵によって、狂言の舞台を疑似体験してもらおうのが目的である。伝承の上では重要な演技上の注意などのト書きは必要ない。祝本「盗む雁」にあたる外篇「雁大名」の冒頭を示す。

▲大名 八まん大みやう、永々在京した所に、新知を大ぶんくだされ、やがて国へくだる、くわじやある
か ▲くわじや おまへに ▲大名 やい／＼、やがて国へくだる、皆々様をふるまひたいが、さかななどもが
あるか ▲くわじや いや、おさかな物は、たゞいま何も御ざりませぬ ▲大名 それならばさかなだなへい
て、よいさかな物をかふてまいれ ▲くわじや 畏て御ざる ▲大名 やがてこい ▲くわじや 心得ました

(がん大名 巻四一一)

しかし、こうした読み物としての狂言記を編集する上で、固定伝承期前後の様々の流派の狂言台本、それも手控えや稽古用の台本までもが集められたことが推定されている。そうしてみると、狂言記と祝本は記述形態こそ大きく異なるが、書き留められた狂言には時期や出自において共通点があることになる。そこで次に、この祝本「盗

む雁」の引用部分について、記述形態ではなく、内容や詞章の面から他台本と比較してみる。

内容的には、田舎大名が名乗り、国本に下る前に振る舞いをしたいので、そのためのさかなを買って来るように太郎冠者に命ずるという場面で、祝本と天理本・虎明本・外篇との間に顕著な一致もなければ、決定的な相違もない。ただし、祝本では買物命ずる前に、太郎冠者に「馬や牛に乗せてやろうか」などとざれ言を言っている。このやりとりは、引用部分では「…のごとく」と省略されているが、それぞれ天理本では「麻生」に、虎明本では「入間川」に記されており、外篇だけにこのやりとりがないことになる。

いっぽう、セリフを見てみると、祝本では「いかゞあろぞ」「いかゞ御座ろぞ」など、「あらうぞ」「ござらうぞ」の助動詞「う」が短呼された例が見えるのだが、これは天理本・虎明本では少なく、正篇など狂言記に盛んに現れる例である。それ以外では、祝本では大名が名乗りで「長々在京仕候」「御暇出候間」のように「候ふ」という、能の詞章に多い古い言葉を用いていること、また、太郎冠者を大名が「太郎」と呼んでいることなど、天理本・虎明本・外篇いずれとも異なる点も指摘できる。これらのことは、祝本が大蔵流・和泉流という流派とは異なった伝承や詞章を持った狂言を写している文献であること、さらにまた、大蔵流・和泉流と異なるという点では共通するものの、狂言記系の狂言とも異なっていることを示しているようである。こうした祝本の特徴を見きわめ、位置づけてゆくことは、狂言記を含めた他の狂言台本の位置づけのためにも重要であると考える。

三、外篇との用語の比較

前述の坂口（一九九七）において、既にいくつかの語彙や文法現象について、祝本と他台本の比較が行われている。その結果は語彙や文法現象ごとに近似する台本が違っており、

少なくとも「祝本」のことは、「狂言記」（大倉注、正篇のこと）よりも下ることはなさそうだということは言えそうである。
（二六四頁）

と述べて、二段活用動詞の一段化の比率など、正篇に近い現象がある以上、それ以前の書写の虎明本・天理本ま

で言語的にさかのほり得ないことを認めている。前節で指摘した助動詞「う」の短呼の例も正篇と共通しており同様の解釈が必要となるだろう。そのうえで坂口は、祝本を次のように位置づけている。

しかし問題は、国語の流れの中に「祝本」のことは置いた場合、それが「虎明本」や「天理本」より新しい言語を反映している部分が多いということである。これは、「祝本」が「虎明本」や「天理本」よりも古い成立らしいということと、一見矛盾しているかの如くである。これについては、なおよく考えてみたいと思うが、一つの解釈として、「祝本」は、確かに成立そのものは「虎明本」や「天理本」より古い、大藏流・和泉流の正統を継ぐ宗家の狂言である「虎明本」や「天理本」が、中世以来の伝統をことばの面でも多く残しているのとは違って、より近世的な、くだけた口語を積極的に採用した結果だと考えてはいかがであるうか。つまり「祝本」は、「狂言記」について推測されているのと同じような、傍流あるいは町風の台本で、「狂言記」よりは古い本と考えてみたいのである。(三六四―五ペ)

本稿の筆者も、前節で見た本文記述の形態の比較から、この位置づけを支持するものであるが、坂口の言う「傍流あるいは町風の台本で、『狂言記』よりは古い本」の例として、ここでは外篇に注目したい。正確に言えば、拙稿で区別してきたように、外篇のなかでも和泉流狂言三百番集に近い一三番を除いた三七番の狂言である。これら三七番は、用語の特徴からも正篇よりも古い狂言を残していると見られるからである。これら外篇の三七番（以下では「外篇Ⅰ」と呼び、和泉流狂言三百番集に近い十三番は「外篇Ⅱ」と呼んで区別する）と祝本とを比較することで、さらに祝本の特徴が明らかになるのではないだろうか。以下では、固定伝承期の狂言で整理・統一されてゆく用語をあげて、比較してみる。

三の1 「さ」しらるる

永井（一九八七）でも指摘されている（二四七ペ）が、祝本では尊敬語としての「（さ）せらるる」が、

①みなく／＼たちをもたさしらるる、（しだうはうがく 大名↓冠者 2オ）

②さらばとらしられよといふ所で (ぬすむがん 商人↓冠者 7オ)

のように、「(さ)しらるる」の形で盛んに用いられている。この「(さ)しらるる」は虎明本・天理本にもわずかずつ用いられているが、勢力は弱く、全体としては本来の「(さ)せらるる」を主に用いている。これに対し外篇Iでは「(さ)しらるる」がやはり多用されている。

③▲くわじゃ おしへてつかはしられい (やなぎ樽 冠者↓との 一19ウ)

④某が則おふて参らふ おはれさしられませい (因幡堂 男↓女房 一22オ)

また、「言ふ」の尊敬語「おほせらるる」が、同様に變化した「おしらるる」も、祝本、外篇Iともに用いられている。これらの語形は他に原刊本「捷解新語」で多用されることが知られており、江戸初期の限られた時期に現れた語形と見られ、この点での祝本と外篇Iとの類似は注目してよいだろう。

三の2「おちやる」「おりやる」

祝本の状況は永井・坂口でも指摘されているが、全体で「おちやる」六例、「おりやる」二例、「舎弟」をみると、

⑤内におちやるか(兄↓弟34オ)

⑥それがしがいつしやていした事がおじやるぞ(弟↓兄36ウ)

のように一つの曲の中で併用されている。外篇Iでは「おちやる」二五例、「おりやる」一例とやはり併用されているが、「おちやる」がかなり優勢であり、やや差が見られる。

三の3「ござある」「jyon」「ござない」

祝本の状況は坂口に指摘があり、「いござある」「一例」「いござる」「一三八例で、併用されているものの」「いござある」は「さつくわ」の次のような、主人の口上を述べるセリフの例で、「いござる」と併用されている例のみであ

る。

⑦ 爰にてもかしこにてもれんがばかりで御座る。さやうに御ざあれば、それがしあまり無調法にて、

(大名↓冠者 43才)

いっぽう外篇Iでは「ござる」専用で「ござある」は用いられていないのでやや異なる。また、否定形式としての「ござない」と「ござらぬ」では、祝本が「ござない」六例、「ござらぬ」九例、外篇Iが「ござない」八例、「ござらぬ」二〇例と、ともに併用ながら「ござらぬ」が優勢という点で共通する。

三の4 「まらする」「まする」

「まらする」が狂言詞章の整理・統一を見る手がかりの一つとなることは拙稿でも述べたことがあり、祝本では永井(一九八七)の指摘のように「まらする」「まする」が併用されてはいるが、「まらする」の例は、

⑧ めしあげらる、御方へれうそくでうりまらする(まんちううり 売子↓大名 18ウ)

の一例にしかすぎず、「まする」八四例と圧倒的である。その中には

⑨ かりそめながらおしへましょ(とびこゑしんぼち 男↓新発意 10ウ)

のように前節でふれた助動詞「う」の短呼の例も多く、正篇・続篇に近い。これに対し、外篇Iでは「まらする」二六例、「まする」三四一例で、「まする」が優勢であるが、「まらする」も併用されており、三の1で挙げた「(さ)しらるる」の使用とともに、「まらする」の使用が外篇Iの狂言の古さを示す代表例であった。また、「ましょ」の短呼の例は外篇Iにはなく、この点でも祝本と異なる。

三の5 「ほどに」「によつて」「ところぞ」

接続形式についても、台本間に相違があり、坂口がこの原因・理由を表す接続形式について調査している。

祝本では「ほどに」五七例、「によつて」五例、「ところぞ」一〇例と、「ほどに」の勢力が強い。外篇Iでは、

「ほどに」三八例／＼「によって」一〇例／＼「ところで」二九例と、やはり「ほどに」の勢力が強い。また、拙稿でもふれたように、「ところで」はキリシタン資料に例の多い形式で、「まらする」と使用時期が重なっており、この「ところで」が祝本では、

⑩けんくわ仕ろ所_で、あれが中ばいに入ましょ (ぬすむがん 冠者↓大名 8ウ)

のようにセリフ部分だけでなく、地の文でも

⑪さらばとらしられよといふ所_で、とつてさらば／＼と言てにぐる所_で、がんのうりてとらゆる

(ぬすむがん 7オ)

多用されていることが永井の指摘にある。この「ところで」が「によって」よりも多く用いられている点でも外篇Iと祝本は共通している。

四、祝本の位置

いくつかの語に注目し、祝本と外篇Iとを比較してみた。語がともに用いられているという点では、三の1「(さ)しらるる」3「(ござない)5「ところで」などに共通点がみられたが、用例数や併用された比率を比べると2「おちやる」4「まらする」4「まらする」4「まらする」では、かなりの差が現れており、3「(ござない)5「(祝本でも一例)は外篇Iには例がなかった。祝本も外篇Iも分量としては少なく、数や比率にこだわることも限界はあるが、やはり虎明本・天理本よりは、祝本と外篇Iに類似はあるものの、その差もはつきりしてきた。まだまだ多くの検討が必要ではあるが、これまでの比較をふまえ、祝本の位置については次のような見通しを立てておく。

1、祝本の成立は、外篇Iとの用語上の類似からも、外篇Iに反映された狂言と同時期、すなわち狂言の固定伝承期の最初期、一七世紀前半と考えられる。

2、狂言固定伝承期の詞章整理・統一の動きの中で、祝本は外篇Iや大藏流虎明本・和泉流天理本とは異なつた傾向にあり、それが「おちやる・おちやる」「まらする・まらする」の使用にも現れている。

この2について注目されるのが、祝本における「候ふ」の多用である。祝本では、

⑫ 長々在京仕候。そしやう相かない、本地被下るのみならず、しんちまではいりやう仕つた。さあれば御暇

出候間、国本へ罷下と言。

(ぬすむがん 大名 名乗り 6才)

のように名乗りの例もあるが、

⑬ 別の事はない。先すきには路地以下ほむる物で候。尤のせらる、とはおもひながら、ほめられたはうれしい物じやによつて、先物ごにほむる物で候。

(とびこゑしんぼち 新発意↓男 10才)

⑭ いやそれがしがたべる事はめいわくにて候と申す。何とかわりの事がめいわくなといふか

(まんぢううり 売り手↓大名18ウ)

など、会話場面にも用いられているのである。「候ふ」はもともと鎌倉室町期の語であり、能の詞章には多用されるが、狂言では名乗りや謡がかつたセリフに用いられるのがほとんどで、会話部分に用いることは外篇Ⅰにはみられず、虎明本・天理本でもわずかしかない。こうした「候ふ」を、祝本では「止動方角」や「盗む雁」など特に前半の曲で会話部分にまで用いているのである。これは祝本の詞章整理・統一の動きが、間狂言で用いるような能の言葉に接近する方向にあったことを示すのではないだろうか。いっぽうの虎明本・天理本、そして外篇Ⅰなどの詞章整理・統一の動きは、自流派で傳承してきた、何代か前からの祖先たちの詞章を整理選択する方向で行われていると考えられる。このために、「おりやる・おちやる」「まらする・まする」「ござある・ござる」の使用において、祝本と外篇Ⅰや虎明本・天理本との差があらわれていると今のところ解釈しておきたい。自流派での傳承を意識しない、あるいは傳承を持たないために、祝本では用語の新旧に大きな振幅が現れているのではないだろうか。

また、これは、例の指摘でしかないのであるが、祝本には次のような「でござる」の例が一例ある。

⑮ さっ／いや、それがしはそちがたのふだ物のおちである。太座／で御座る。さっ／此ひろいらく中でそのま、それがしにあふてあるはくわほうなものはないか。

(さつくわ さつくわ ↓太郎冠者 44ウ)

太郎冠者が探していた伯父だと相手から名乗られて、驚きながら確かめる場面である。この応答での「でござる」については、鷺保教本に「デ御座ル 答ルニ云鷺方ノ言葉ナリ」の記述があり、蜂谷（一九八六）（一九九八）鈴木・渡部（一九九二）で、鷺流のいくつかの台本にこうした「でござる」の例があることが報告確認されている。⑮の例も同じ用法であり、時期は異なるが、祝本の位置や流派を考える上で見過ごせない例であるが、筆者はまだ明確な解釈を持っていない。ここでは例を指摘し、祝本の位置づけのための今後の課題としたい。

（以上）

（注）

- (1) 永井（二九八七）の翻刻・解説による。引用に当たっては、他の台本との比較の便を考慮して、表記などを改め、濁点を補った。
- (2) 本稿で用いた主な狂言台本および版本狂言記は以下の通りである。（一）内は本稿での略称。
- ・天正狂言本 固定化以前の室町後期の狂言を残す台本。内山弘「天正狂言本文・総索引・研究」（平一〇 笠間書院）を用いた。
 - ・大藏虎明書写「狂言之本」（虎明本） 寛永一九（一六四二）年書写。池田廣司・北原保雄共著「狂言集の研究」（昭四七）五八 表現社）を用い、複製本を参照した。
 - ・天理図書館蔵「狂言六義」（天理本） 寛永十正保ごろ山脇和泉元宜か元永書写か。北原保雄・小林賢次共著「狂言六義全注」を用い、複製本を参照した。
 - ・「狂言三百番集」（三百番集本） 野々村戒三・安藤常次郎共編（昭一三）一七 富山房）を用いた。底本は幕末の和泉流狂言師三宅庄市手沢本をもとにしたもの。
 - ・鷺保教本（保教本） 享保年間鷺伝右衛門保教書写。天理図書館善本叢書「鷺流狂言伝書」（昭五九 八木書店）を用いた。
 - ・「絵入狂言記」（正篇） 万治三（一六六〇）年刊。北原保雄・大倉浩共著「狂言記の研究」（昭五八 勉誠社）を用いた。
 - ・「新板絵入狂言記外五十番」（外篇） 元禄一三（一七〇〇）年刊。北原保雄・大倉浩共著「狂言記外五十番の研究」（平九 勉誠社）を用い、鴻山文庫蔵本を参照した。

・「続狂言記」(続篇) 元禄一三(一七〇〇)年刊。北原保雄・小林賢次共著「続狂言記の研究」(昭六〇 勉誠社)を用いた。

・「狂言記拾遺」(拾遺) 享保一五(一七三〇)年刊。北原保雄・吉見孝夫共著「狂言記拾遺の研究」(昭六一 勉誠社)を用いた。

以下、四種二百番の版本狂言記を総称して「狂言記」と呼ぶ。

(13) (4) (5) (16) 大倉浩(一九八五)(一九九一)など参照。

以下、本文の引用にあたっては、他の台本との比較の便を考慮して、表記を改め、濁点を付した。

祝本でも後半の「さつくわ」「かうじ」などには役名の略称や合点が用いられており、セリフも詳しい。内部での記述形態の振幅が大きいことも、この文献の私的な特徴を示していると考えられる。

大倉浩(一九九七) 参照。

(7) (8) 比較に当たっては、坂口(一九九七)に同じく祝本ではセリフと見られる部分の例に限る。()内に曲名・話し手・聞き手・所在を示す。

【参考文献】

池田廣司(一九五三)「版本狂言記の台本について」(『国語』二一三 昭和二八年九月)

同(一九六七)「古狂言台本の発達に関する書誌的研究」(昭和四二年 風間書房)

大倉浩(一九八五)「版本狂言記の「おりやる」と「おぢやる」」(『日本語と日本文学』五 昭和六〇年一月)

同(一九九一)「狂言記外篇」の「まらする」」(『国語国文』六〇巻七号 平成三年七月)

同(一九九七)「語法・用語から見た「狂言記外篇」」(『文芸言語研究 言語篇』三一 平成九年三月)

小林賢次(二〇〇〇)「狂言台本を主資料とする中世語彙語法の研究」(平成二二年 勉誠出版)

小山弘志(一九五六)「狂言の変遷」(『文学』昭和三二年 七月)

坂口至(一九九一)「祝本狂言集」の表記」(『筑紫語学研究』二 平成三年二月)

同(一九九七)「祝本狂言集」用語考」(『熊本女子大学国語国文学研究』三三 平成九年二月)

鈴木浩・渡部圭介(一九九一)「罵流狂言」延宝・忠政本」の国語資料としての位置づけ」(『日本近代語研究』一 平成三年一〇月 ひつじ書房)

永井猛(一九八七)「祝本狂言集」翻刻と解説」(『能楽研究』一一 昭和六二年三月)

- 橋本朝生・土井洋一（一九九六）『狂言記 新日本古典文学大系58』（平成八年 岩波書店）
- 蜂谷清人（一九七七）『狂言台本の国語学的研究』（昭和五二年 笠間書院）
- 同（一九八〇）『狂言のことば（補）』（『能楽全書 総合新訂版五』昭和五五年八月 東京創元社）
- 同（一九八六）『鶯保教本と『狂言』ことば』（佐藤喜代治編『国語論究1』昭和六一年五月 明治書院）
- 同（一九九八）『狂言の国語史的研究』（平成一〇年 明治書院）